

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531223

研究課題名(和文) 学校音楽カリキュラム経験研究 子どもの教科学習の「学び」の経験と意味の実証的解明

研究課題名(英文) The Study of School Music Curriculum Experience:How do children experience school music?

研究代表者

笹野 恵理子(SASANO, ERIKO)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70260693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：学校音楽カリキュラムは、当事者である子どもに実際にどのように経験されるのか。この問いに支えられて、本研究の目的は、学習者の「学校音楽カリキュラム経験」を解明することにある。本研究では、この課題を、次の2つの手法から解明しようとした。1) 質問紙調査から量的分析によってカリキュラム経験の内容構造を支える因子を析出した。2) 大学生による学校音楽経験の「語り」の分析をとおして、質的分析によって仮説モデルを構想した。

研究成果の概要(英文)：The fundamental research question supporting this research is as follows. How is a school music curriculum experienced by children? This is the most fundamental research question. This study will discuss and analyze how children experience the school music curriculum.

In this study, we will say children's school music curriculum experience, and this paper will try to analyze the following two techniques.

1) This study will try to analyze the contents of children's curriculum experience. this paper will examine the children's curriculum experience using quantitative analysis. 2) This study will try to narrative approach. We will propose the theoretical model of children's curriculum experience by the qualitative analysis through analysis of narration of the school music experience by the college students.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：学校音楽 カリキュラム経験 経験されたカリキュラム 学校音楽文化 潜在のカリキュラム 生きられたカリキュラム 韓国 学校音楽カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究が着目する鍵概念は、「潜在的カリキュラム」である。本研究は、潜在のカリキュラムが指摘した「教育意図と学習経験の乖離」に着目し、当事者が「実際に学んでいる内容」とその経験産出過程、言い換えれば「意味の再構成過程」に関心を払う。本研究の「学校音楽カリキュラム経験研究」は、潜在のカリキュラム研究の可能性を追究する過程で着想に至ったものである。

(2) 潜在のカリキュラムの発見は、近年のカリキュラム研究の大きな成果であるといわれる (Jackson, P.W.)。潜在のカリキュラム概念の提起は、カリキュラム理論と実践の間に横たわる「現場」の矛盾や、その曖昧模糊とした教育現実に対する様々な人々の感覚など、単一的、単線的なカリキュラム研究観では見出せなかった多様な文脈をすくいだし、可視化する思想を提出した。

それが示唆するのは、カリキュラム研究において、ひとつには、当事者である教師や子どもの「経験」とそれを構築する文脈を研究の俎上にのせることの必要性であり、今ひとつは、カリキュラムを関係性の視点から多元的、複線的に把握することの重要性であったといえる。

(3) すなわち、カリキュラムの「実質」は、当事者の視点から具体的経験に肉迫しなければ、十分に解明されない。90年代以降、欧米を中心に、学習者の経験をぬぎにカリキュラムを語る研究の危険性が指摘されている (Erickson, F. & Shultz, J. 1992, Pollard, A. 1998 など)。教科カリキュラムにおけるそれも、実際の子どもの「学び」の具体的経験を解明してこそ、当該カリキュラムの効果や成否を確認でき、教科学習の「学び」の意味を明らかにし得る。

(4) このような課題意識にたつて、申請者は当事者の経験というレベルからカリキュラム研究をたちあげるといふ研究視角を構想してみた。この研究枠組を用いて、これまで下記のことを明らかにしてきた。

学校音楽カリキュラムを「伝達されたカリキュラム」(教師)と「経験されたカリキュラム」(学習者)として別個の視角から解明する研究枠組の構想

「伝達されたカリキュラム」における教師の意味付与を規定する文脈の析出とその力学的様相の解明

(5) 本申請課題では、上記研究で十分着手、展開できなかった学習者の経験の意味の再構成過程の解明に研究を絞り込み、学習者の学校音楽カリキュラムを経験されたレベルで解明する。

すなわち、本研究の問題関心は、右の1点にある。学習者にとって学校音楽カリキュラ

ムとはどのようなものか。カリキュラムを「生きた姿」で、「生きられたカリキュラム」を解明することである。本研究では、それを学習者の「学校音楽カリキュラム経験」と呼んで対象化し、学校音楽カリキュラムを当事者である子どもの視点から「経験された」レベルで実証的に解明する。

2. 研究の目的

学校音楽カリキュラムは、当事者である子どもに実際にどのように経験されるのか。この問いに支えられて、本研究の目的は、学習者の「学校音楽カリキュラム経験」を解明するものである。

具体的に本研究では次の2点を問う。

(1) 紙の上のカリキュラムが実施されるとき、カリキュラムに埋め込まれた教科学習の教育意図を学習者はどのように意味づけて経験するのか。

(2) その経験の意味はどのように編み直されるのか。

ここから本研究では、日本の学校音楽カリキュラム経験の内容構造と産出過程を実証的に明らかにするとともに、個々人の生涯の「学びの履歴」という観点から、長期的スパンにたつた学校音楽カリキュラムの意味と効果を再検証したい。

3. 研究の方法

(1) 日本の子どもの学校音楽カリキュラム経験を解明するために、質問紙調査を実施し、量的分析を行う。具体的には、探索的因子分析を行い、学校音楽カリキュラム経験の内容構造を支える要因を解明する。これを制度化されたカリキュラムとの関連で分析する。

(2) 日本の子どもの学校音楽カリキュラム経験の特質を解明するために、韓国における質問紙調査を実施し、韓国におけるそれと比較相対化して考察する。

(3) 質的分析として、中学校におけるエスノグラフィーを実施する。

(4) 学校音楽カリキュラム経験の意味の再構築過程を解明するため、大学生を対象にインタビュー調査を実施する。大学生の「語り」をグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析する。

(5) 学校音楽カリキュラム経験の意味の再構築過程を解明するため、大学生の音楽自分史を分析する。グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用し、その意味付与を分析する。

4. 研究成果

(1) 子どもの学校音楽カリキュラム経験の内容構造を解明するにあたって、制度化された学校音楽カリキュラムが、実際に子どもにどのように経験されるか、その経験内容構造

を潜在変数として、探索的因子分析を行った。また、日本の学校音楽カリキュラム経験の特徴をより具体的に解明するために、制度化されたカリキュラムが異なった特徴を有すると思われる韓国との比較分析を行った。質問紙調査の回答結果に因子分析を施し(主因子法、バリマックス回転)、日本の子どもの学校音楽カリキュラム経験の内容構造として、次の6因子を析出した。すなわち、「協同性効果」「学習方法」「授業ルール」「音楽的情意」「相互作用」「有能感」である。日本の子どもは、これらの学校音楽カリキュラム経験の内容構造を有しているといえる。

同様に、韓国の子どもの学校音楽カリキュラム経験の内容構造として、次の6因子を析出した。「学習効果・方法」「授業ルール」「音楽的情意」「認識」「生活化」「技能」である。韓国の子どもは、これらの学校音楽カリキュラム経験の内容構造を有しているといえる。

(2) 特筆すべき点として、日本の質問紙調査において、あらかじめカテゴリーに設定した「技能」項目は独立した因子軸として析出されなかった点、また集団性を示唆する因子が析出された点である。すなわち、子どもは、学校音楽では「技能」を経験している認識がなく、集団的に学校音楽を経験する可能性を示唆している。さらに男子と女子では異なる経験構造を有しているが、学年進行によっては経験構造に差がないことも明らかになった。

(3) 大学生による「語り」の分析を通して、下のような学校音楽カリキュラム経験の4類型と適応過程に働く力学的様相の仮説モデルを構想した。縦軸には、「教師との相互作用」が、横軸には、「学習者間の相互作用」が経験の分化をうながすと考えられる。

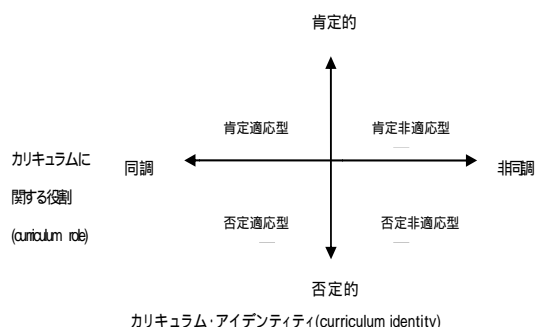


図 学校音楽カリキュラムへの適応過程におけるダイナミズムの仮説モデル

(4) 大学生による「語り」と「音楽自分史」の分析をとおして、以下の学校音楽カリキュラムへの意味付与の5つのカテゴリーをグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて析出した。

集団的経験としての学校音楽経験

②芸術音楽教育としての学校音楽経験(音楽観の拡大という意味付与)

③教師に規定される学校音楽経験

④「文化資本」から規定される学校音楽経験

⑤即自的レリバンスから規定される学校音楽経験

(5) 大学生の「語り」の分析から、学校音楽カリキュラム経験の仮説モデルとして以下のようなモデルを構想してみた。

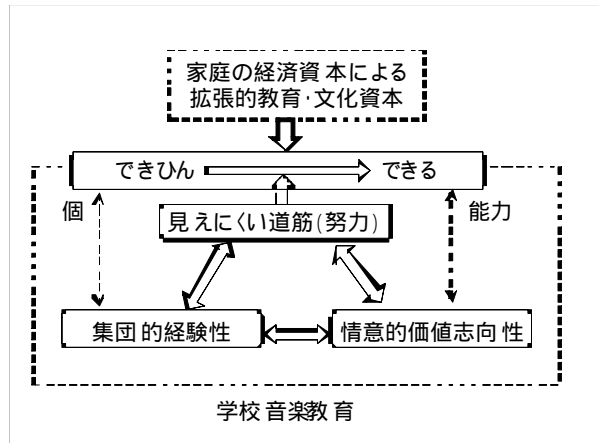


図 学校音楽カリキュラム経験の仮説モデル

生徒たちに意味付与される学校音楽経験は、「集団的経験性」「情意価値志向性」であり、因子分析の結果明らかになったように、「技能」を経験している認識がない。生徒たちの学校音楽を語る際頻出する「できひん子」というキーワードは、「集団的経験性」に対する「個」「情意的価値志向性」に対する「能力」的価値志向性によって成立する概念である。「できる子」が「ひいき」されるという言葉も、「できる子」は学校音楽教育によって「できる」のでなく、家庭の経済資本による拡張的教育によって「できる」ようになると生徒たちは感じている。これらは、「(1)」における因子分析結果、「(4)」におけるカテゴリーの一部を説明し得るモデルである。

(6) 生涯の「学びの履歴」の観点から、広く世代間の差異を解明するにはいたらなかった。今後の課題としたい。またこれまで明らかにしてきたことを再整理して、仮説モデルとその説明を洗練させていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計14件)

菅野恵理子(2013)「大学生の『語り』にみる学校音楽カリキュラム経験—ナラティブ・アプローチによる『経験された』カリキュラムの実証的解明—」『関西楽理研究』(関西楽理研究会編) Vol.30 pp.242-253.査読有

笹野恵理子(2013)「学校音楽文化とジェンダー分化—子どもたちの学校音楽経験にみるジェンダー差異の様相—」『音楽教育実践ジャーナル』(日本音楽教育学会編)第11巻1号 pp.80-89. 査読有

笹野恵理子(2013)「学校音楽カリキュラム経験の研究—学校音楽文化研究への視角」『音楽教育学』(日本音楽教育学会編)第43巻第1号 pp.42-50. 査読有

嶋田春奈・岩田真由子・笹野恵理子(2013)「日本人学校における音楽教育実践—音楽専科教員の『語り』の分析—」『学校音楽教育研究』(日本学校音楽教育実践学会編)第17巻 pp.189-190. 査読無

野垣内菜穂・笹野恵理子(2013)「音楽科授業における協同学習の可能性—箏のアンサンブル授業の検討をとおして—」『学校音楽教育研究』(日本学校音楽教育実践学会編)第17巻 pp.196-198. 査読無

笹野恵理子(2012)「音楽教育実践研究における『記録』の諸相—量的研究と質的研究における『記述』と『解釈』をめぐって—」『音楽教育学』(日本音楽教育学会編)第42巻2号「常任理事会企画プロジェクト研究—音楽教育学における『記録』」 pp.41-51. 査読無

笹野恵理子(2012)「学校音楽カリキュラムへの適応過程におけるダイナミズム」『関西楽理研究』(関西楽理研究会編) Vol.29 pp.57-73. 査読有

宮本隆信・刈谷三郎・上野行一・小島郷子・笹野恵理子(2012)「実技教科授業における子どもの学びの経験—日本と韓国の小学校の授業比較を通して—」*Korean Journal of the Japan Education* (The Society of Korea for Japan's Education) Vol.17, No.1 pp.213-229. 査読有

笹野恵理子(2012)「子どもの学校音楽カリキュラム経験の内容構造分析—日本と韓国における質問紙調査の分析を通して—」『カリキュラム研究』(日本カリキュラム学会編)第21号 pp.57-71. 査読有

野垣内菜穂・笹野恵理子(2012)「高校生の部活動にみる音楽活動の形成過程—高等学校における軽音楽部のエスノグラフィ—」『学校音楽教育研究』(日本学校音楽教育実践学会編)第16巻 pp.25-36. 査読有

笹野恵理子(2012)「海外教育事情：日韓国際シンポジウム 報告と韓国の音楽教育」『学校音楽教育研究』(日本学校音楽教育実践学会編)第16巻 p.282. 査読無

笹野恵理子(2011)「学校音楽はどう経験されるか—潜在的カリキュラム研究の視点からみえてくるもの—」『初等教育資料』文部科学省(東洋館)第880号

pp.68-75. 査読無

Eriko SASANO (2011) “ The Possibilities of Art Management Education in Higher Education :from the viewpoint of music education ” *The Prospect of Dance Studies and Career Research* pp.25-36. 査読有

Takanobu Miyamoto, Saburo Kariya, Yook, Cho-Young, Koichi Ueno, Kyoko Kojima, Eriko Sasano, Ju, Sung-Bum, “ Attempt of Making of Teaching Evaluation vote in Republic of Korea Elementary School Practice Class—Factorial analysis of Subject Class Investigation by Students— ” *Journal of Korea Sport Research* , Vol.22-2, pp.27-47. 査読有

〔学会発表〕(計10件)

笹野恵理子「学校音楽を『教える』ことと『学ぶ』ことの諸相(3)—中学生の学校音楽カリキュラム経験—」日本音楽教育学会第44回大会(2013/10/12) 於：弘前大学(青森県弘前市)

笹野恵理子「音楽教育実践研究における『記録』の諸相—量的研究と質的研究における『記述』と『解釈』をめぐって—」日本音楽教育学会第43回大会常任理事会企画プロジェクト研究「音楽教育学における『記録』」(共同発表者：寺田貴雄・近藤謙・石出和也)(2012/10/08) 於：東京音楽大学(東京都豊島区)

笹野恵理子「学校音楽を『教える』ことと『学ぶ』ことの諸相(2)—学校音楽カリキュラム経験研究—」日本音楽教育学会第43回大会(2012/10/07) 於：東京音楽大学(東京都豊島区)

野垣内菜穂・笹野恵理子「音楽科授業における協同学習の可能性—箏のアンサンブル授業の検討をとおして—」日本学校音楽教育実践学会第17回全国大会(2012/08/19) 於：鳴門教育大学(徳島県鳴門市)

嶋田春奈・岩田真由子・笹野恵理子「日本人学校における音楽教育実践—音楽専科教員の『語り』の分析—」日本学校音楽教育実践学会第17回全国大会(2012/08/18) 於：鳴門教育大学(徳島県鳴門市)

刈谷三郎・申範中・宮本隆信・笹野恵理子他4名「実技教科における 学びの経験 とは何か」日韓国際シンポジウム(日韓教科教育研究会)(2012/02/03) 於：高知大学(高知県高知市)

笹野恵理子「日韓の子どもの学校音楽カリキュラム経験と学校音楽文化—制度化されたカリキュラムはどう経験されるか—」日本教科教育学会第37回全国大会(2011/11/12) 於：国際沖縄大学(沖縄県那覇市)

笹野恵理子「音楽教育研究において潜在的カリキュラム研究とは何か(7) 学校音楽を『教える』ことと『学ぶ』ことの諸相」

日本音楽教育学会第42回大会(2011/10/22)

於：奈良教育大学(奈良県奈良市)

Eriko SASANO “The Possibilities of Art Management Education in Higher Education :from the viewpoint of music education ” The 2nd International Dance Symposium 2011 (2011/10/06) Korea National Sport Univ. (Seoul, South Korea)【招待発表】

笹野恵理子「学校音楽はどう経験されるか—生きられる学校音楽カリキュラム—」日本音楽学習学会第7回大会講演(2011/08/29)
於：関西学院大学梅田キャンパス(大阪府大阪市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹野 恵理子 (SASANO, Eriko)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70260693